

会計学総論レポート

担当教員：円谷 昭一 准教授

分析企業 **日本特殊塗料** (証券コード：4619)

経済学部 1年

目次

1. はじめに
2. 担当企業、比較企業紹介
 - 日本特殊塗料株式会社
 - 関西ペイント株式会社
 - 藤倉化成株式会社
3. ファンダメンタル分析
 - I. 安全性分析
 - II. 収益性分析
 - III. 効率性分析
 - IV. 労働効率性分析
 - V. 成長性分析
 - VI. 株式還元率分析
 - VII. 市場評価分析
4. 総合的分析
5. 参考文献

1. はじめに

私が日本特殊塗料(株)の比較企業として、関西ペイント(株)と藤倉化成(株)を選んだ理由は、関西ペイント(株)は化学部門の塗料関係の企業の中ではトップレベルの成績を残しているからである。また、藤倉化成(株)は化学部門の塗料関係の企業の中では日本特殊塗料(株)と同じくらいの資本金で財務関係を比較するのには最適ではないかと思ったからである。

2. 担当企業・比較企業紹介

● 日本特殊塗料株式会社

① 会社概要

- ・ 商号 日本特殊塗料株式会社
NIHON TOKUSHU TORYO CO.,LTD.
- ・ 創立 1929(昭和4)年6月1日
- ・ 代表取締役社長 野島 雅寛
- ・ 資本金 47億5308万円(23,611,200株)
(2010年3月31日現在)
- ・ 従業員数 連結:654人 単独:524人
- ・ 平均年齢 41歳
- ・ 平均勤続年数 19年
- ・ 平均年間給与 583万9765円
- ・ 本店所在地 東京都北区王子5丁目16番7号

② 沿革

- 昭和4年6月 日本特殊合資会社として、東京都北区に設立し東京工場を新設
- 昭和11年8月 株式会社に改組、現在の日本特殊塗料株式会社となる
- 昭和36年10月 東京証券取引所市場第二部に上場
- 平成3年9月 東京証券取引所市場第1部銘柄に指定
- 平成13年10月 当社の全事業所でISO9001を認証取得
- 平成14年11月 当社の全工場(6工場)でISO14001を認証取得

③ 事業内容

日本特殊塗料は、本社、子会社 9 社及び関連会社 10 社により構成されている。

事業内容は大きく分けて 2 つある。

一つ目は、塗装関連事業。塗料、防音材の製造・販売を主とし、その他に塗料・防音材の工事施工等を取り行っている。

二つ目は、自動車製品関連事業。自動車用防音材(制振材、吸・遮音材)、防錆剤等の製造・販売、自動車音響の研究、開発等を取り行っている。

● 関西ペイント株式会社

① 会社概要

- ・ 商号 関西ペイント株式会社
Kansai Paint Co.,Ltd.
- ・ 創立 大正 7 年(1918 年)5 月
- ・ 代表取締役社長 河盛 裕三
- ・ 資本金 256 億 5800 万円(272,623,270 株)
- ・ 従業員数 連結:7729 人 単独:1779 人
- ・ 平均年齢 39.3 歳
- ・ 平均勤続年数 16.7 年
- ・ 平均年間給与 642 万 6 千円
- ・ 本店所在地 兵庫県尼崎市神崎町 33 番 1 号
(本社事務所は、大阪市中央区今橋 2 丁目 6 番 14 号)

② 沿革

- 大正 7 年 5 月 関西ペイント株式会社を兵庫県尼崎市に設立、塗料、顔料の製造開始。
- 昭和 24 年 5 月 大阪、東京の 2 証券取引所に上場。
- 平成 12 年 10 月 全工場 ISO14001 を認証取得。
- 平成 18 年 5 月 環境対応水性塗装技術で「日化協技術賞」を受賞。

③ 事業内容

関西ペイントは、本社、子会社 53 社及び関連会社 29 社で構成されている。

塗料の製造販売が主な事業内容であり、さらに高度処理用担体等の製造販売、フィルムの加工販売及び関連する諸サービス等の事業内容を展開している。

● 藤倉化成株式会社

① 会社概要

- ・ 商号 藤倉化成株式会社
FUJIKURA KASEI CO.,LTD.
- ・ 創立 昭和 13 年 9 月 22 日
- ・ 代表取締役社長 鷲野 襄治
- ・ 資本金 53 億 5212 万円(32,716,000 株)
- ・ 従業員数 連結:835 人 単独:382 人
- ・ 平均年齢 36.6 歳
- ・ 平均勤続年数 12.1 年
- ・ 平均年間給与 640 万 9464 円
- ・ 本店所在地 東京都板橋区蓮根三丁目 20 番 7 号
(本社事務所は、東京都港区芝公園二丁目 6 番 15 号黒龍芝公園ビル)

② 沿革

- 昭和 13 年 9 月 藤倉工業(株)(現藤倉ゴム工業(株))及び藤倉電線(株)(現(株)フジクラ)の化学部門を分離し、航空用有機硝子(メタアクリル樹脂)、塗料及び作動油、その他の製造販売を目的として、東京都板橋区に藤倉化成工業(株)を設立。
- 昭和 20 年 10 月 商号を藤化成(株)に変更。
- 昭和 33 年 12 月 商号を藤倉化成(株)に変更。
- 昭和 37 年 8 月 東京証券取引所第二部上場。
- 平成 13 年 3 月 東京証券取引所の市場第一部に指定。

③ 事業内容

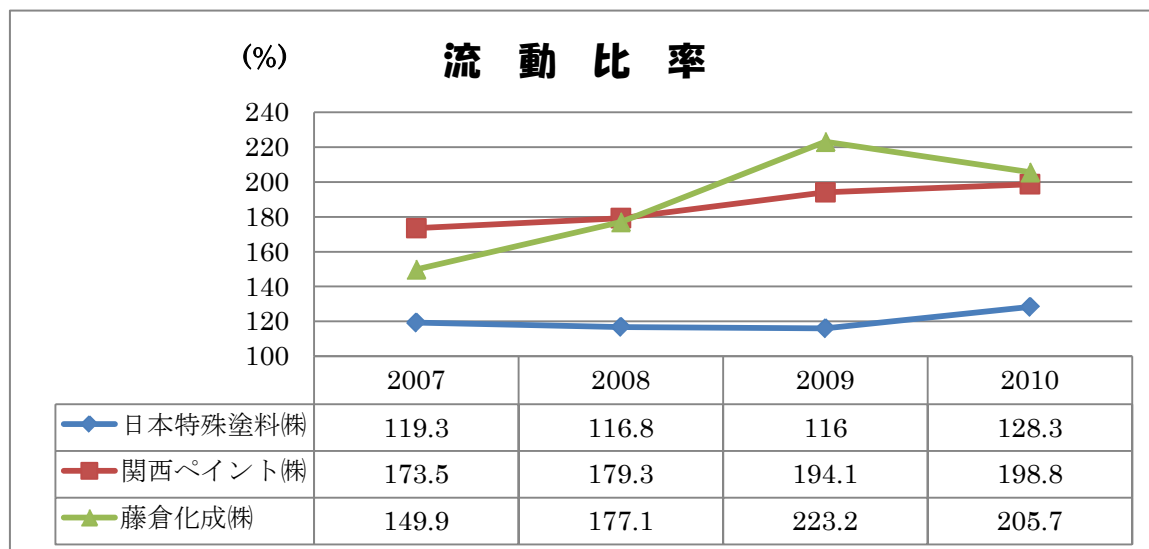
藤倉化成株式会社は、本社、子会社 21 社、関連会社 2 社により構成されている。

アクリル派生樹脂製品に関する事業を主としている。アクリル派生樹脂製品とは、ここではコーティング、電子材料、化成品、合成樹脂の 4 つを指す。

- ・ コーティング事業…プラスチック用コーティング材及び建築用コーティング材を扱う。
- ・ 電子材料事業……導電性樹脂塗料及び導電性接着剤等を扱う。
- ・ 化成品事業……主にトナー用バインダー樹脂、粘・接着剤ベース樹脂等の機能性樹脂ベースを扱う。
- ・ 合成樹脂事業……アクリル樹脂の原材料・加工品を扱う。

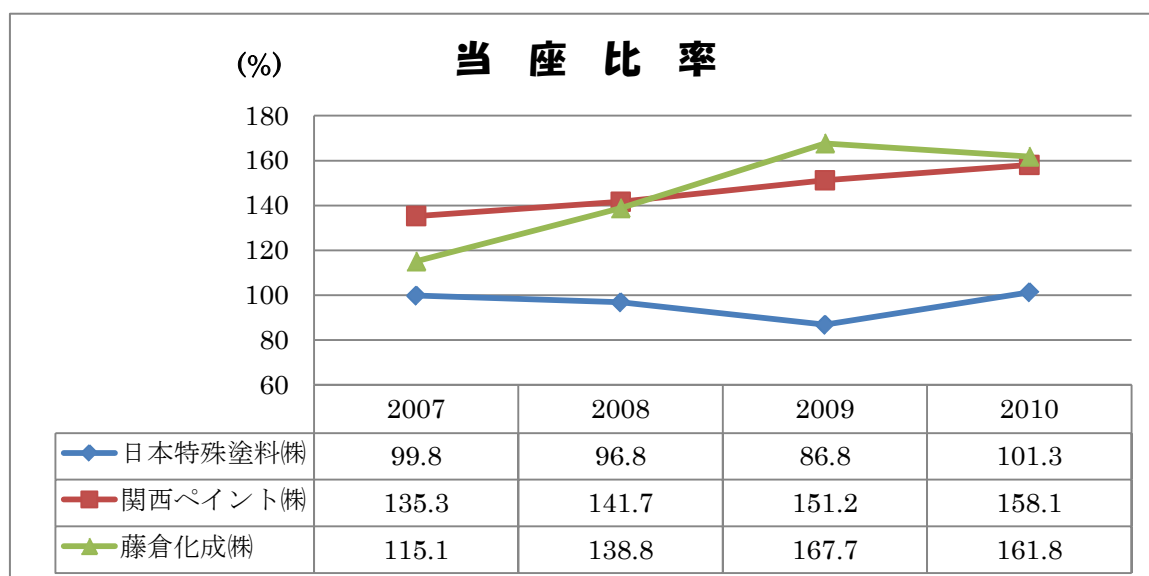
3. ファンダメンタル分析

1. 安全性分析



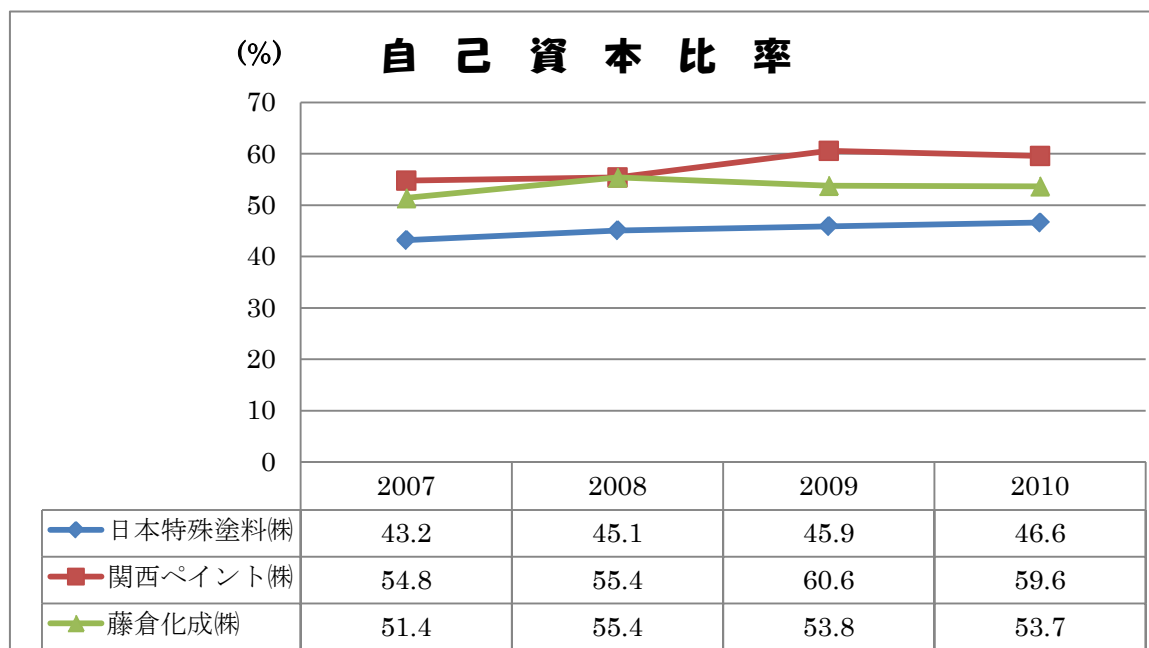
流動比率において、関西ペイント(株)と藤倉化成(株)は化学業界の平均値(2008年 145.66%、2007年 151.84%)を大きく上回っている。関西ペイント(株)は年々着々と上昇しており、今後200%を超える可能性は十分にあると思われる。藤倉化成(株)は昨年度は減少してしまったが、最近二年は200%を超えている。この二社に関しては、短期支払い能力は十分にあると思われる。

一方、日本特殊塗料(株)は業界平均を大きく下回っているが、改善の傾向が見える。それでも理想値である200%には遠く及ばないので、短期支払い能力は低いと考えられる。

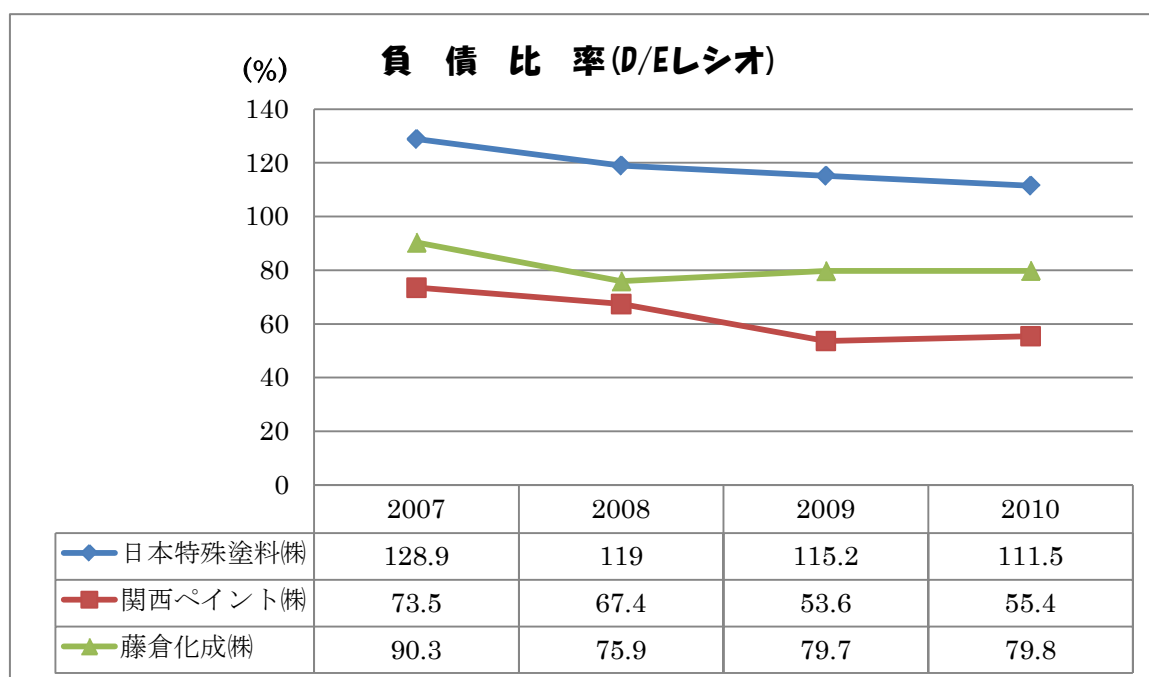


当座比率においても、流動比率と同様に関西ペイント(株)と藤倉化成(株)は理想値である100%を大きく超えており、流動資産から棚卸資産などを除いた換金性が高い現金や売掛金などの当座資産からのみでも、流動負債を支払う能力は十分にあるといえる。

一方、日本特殊塗料(株)は100%前後を行き来しており、短期支払い能力に少し不安が残るように思える。

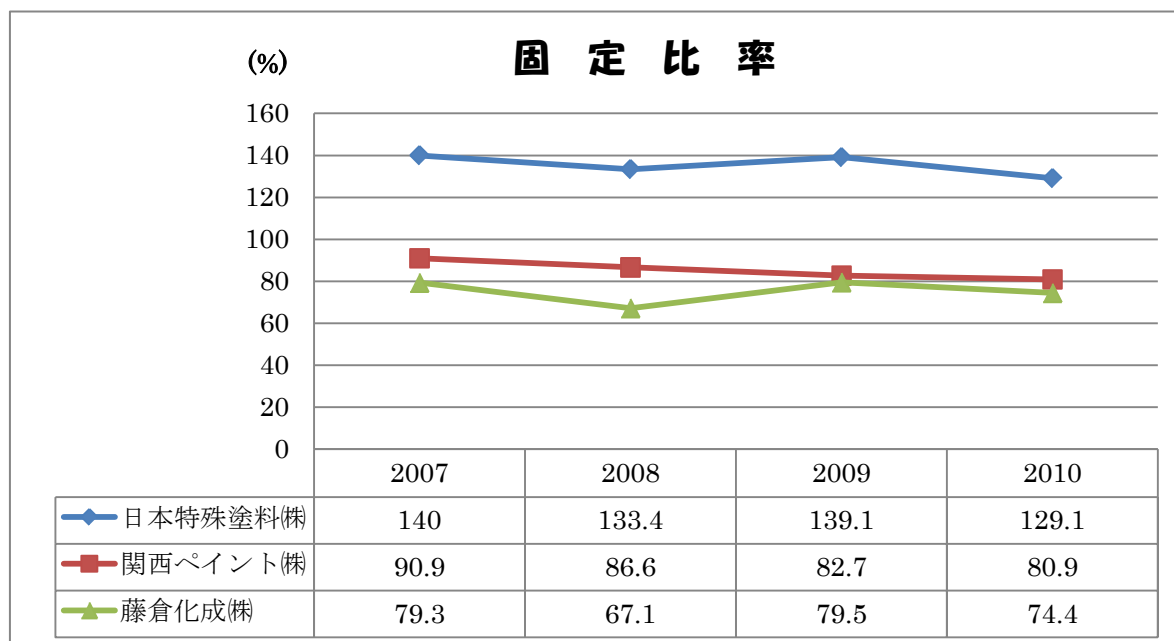


自己資本比率においては、業界平均が二年間で 45~46%程度であることを考えると、日本特殊塗料(株)はほぼ平均値であり、関西ペイント(株)と藤倉化成(株)は 10%前後高い水準を維持している。しかし藤倉化成(株)はここ数年減少傾向にあり、今後の動向を注視していく必要があると思われる。



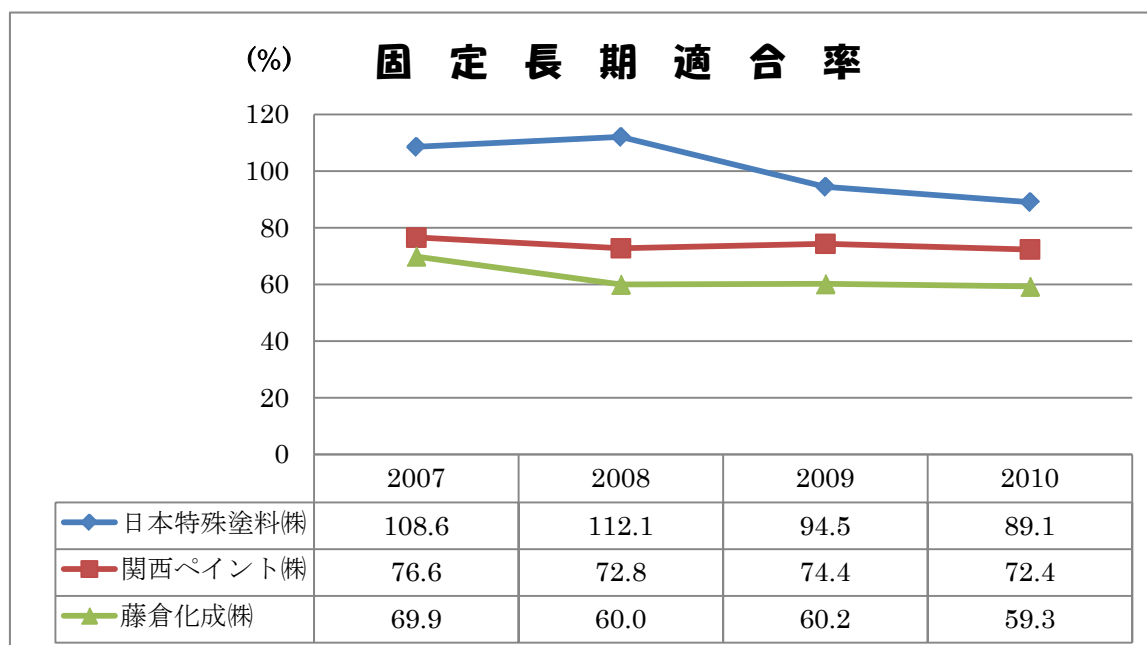
負債比率(D/E レシオ)において、業界平均が 2008 年 106.5%、2009 年 111.2%であるので、日本特殊塗料(株)は業界平均をわずかだが上回ってしまっている。しかし、2008 年の世界的不景気の中でも徐々に減少しているので、今後は安定してくる可能性は高いだろう。

関西ペイント(株)と藤倉化成(株)に関しては、平均を大きく下回っており、多少の上昇も僅かであるので、心配はないのではないかと推測する。

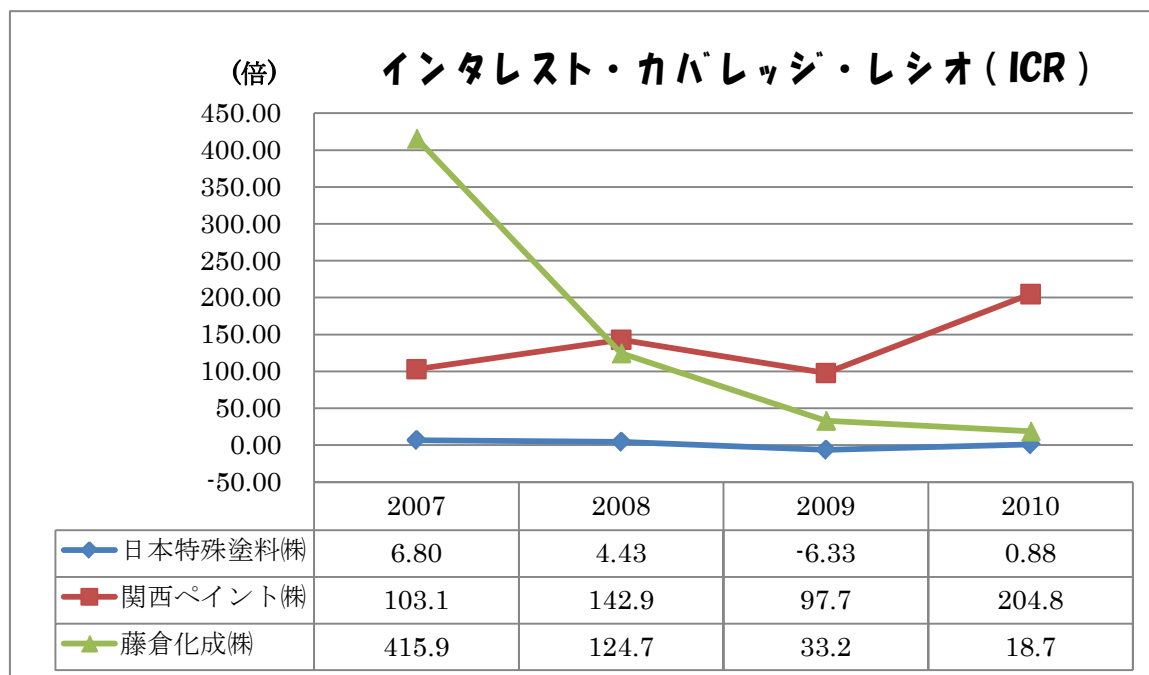


固定比率において、業界平均が2008年112.33%、2009年117.83%となっている。関西ペイント(株)と藤倉化成(株)においては業界平均はもちろん、理想値である100%以下をここ数年は維持しており、安全性は高いだろう。

その一方、日本特殊塗料(株)は固定資産と自己資本の増減の割合が同じような推移である為、なかなか改善の傾向も見受けられず、その上固定比率は理想値のみならず業界平均をもはるかに超えており、安全性には不安が残るだろう。



固定長期適合率において、関西ペイント(株)と藤倉化成(株)は理想の100%以下をここ数年は維持、もしくは減少していると見受けられ、安全性には問題ないだろう。一方日本特殊塗料(株)においても、2009年以降固定資産が減り固定負債が増えたことにより、100%を切り減少が続いていることから、安全性には問題なしと言えるだろう。



ICR においては、業界平均が 2008 年 17.11 倍、2009 年 7.38 倍である。関西ペイント(株)は世界的不況だった 2009 年を除けば、上昇傾向にあり問題ない。藤倉化成(株)は確かに業界平均は上回っているものの、営業利益の低下と支払利息の増加により、年々減少傾向にあるので今後の動向に注視する必要がある。日本特殊塗料(株)は業界平均を常に下回り、2009 年に至ってはマイナス値にまで行ってしまったので、安全性には大きな不安が残る。

1. 安全性分析—まとめ

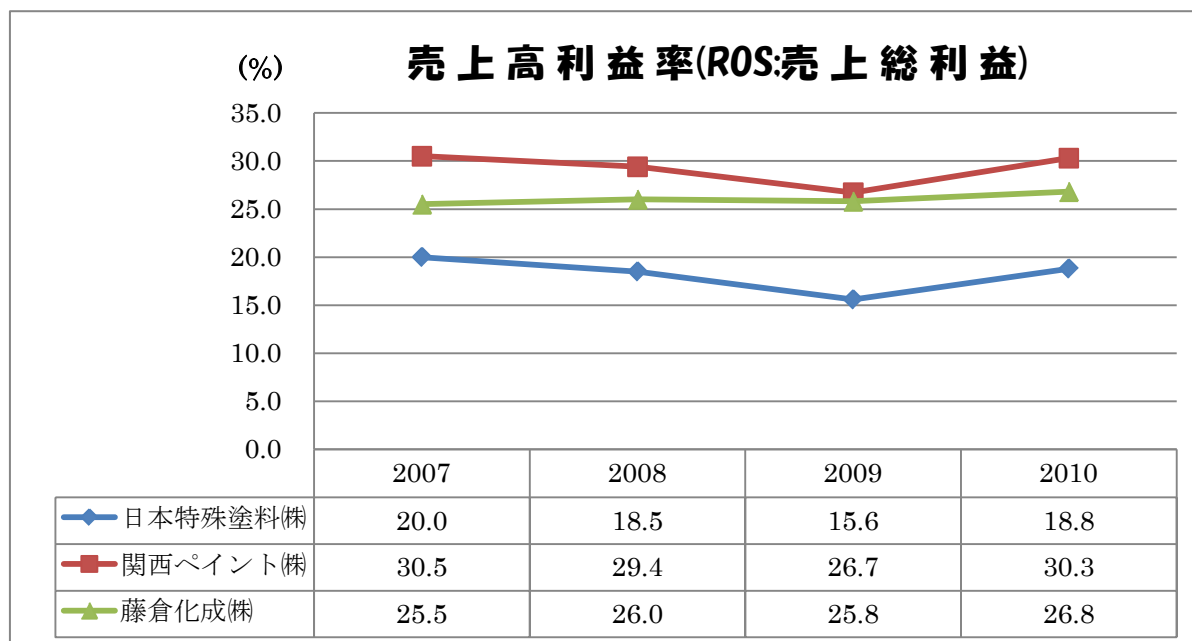
日本特殊塗料(株)は比較企業 2 社、それと業界平均と比べるとどの項目でも安全性に不安が残る結果となった。2008 年後半から発生した世界的な大不況に近い不況が再び発生するようなことになれば、日本特殊塗料(株)は資金面で問題が肥大化し、経営破綻に陥る可能性が生まれてしまうだろう。そうなる前に、より安全性を高めていく必要があるだろう。

関西ペイント(株)と藤倉化成(株)は共に業界平均を上回って安全性が高い企業だと思われる。

ただ、藤倉化成(株)においては、2009 年から 2010 年にかけて安全性の減少傾向が見てとれる。今後、以前のように上昇傾向へと持っていけるかが課題であろう。

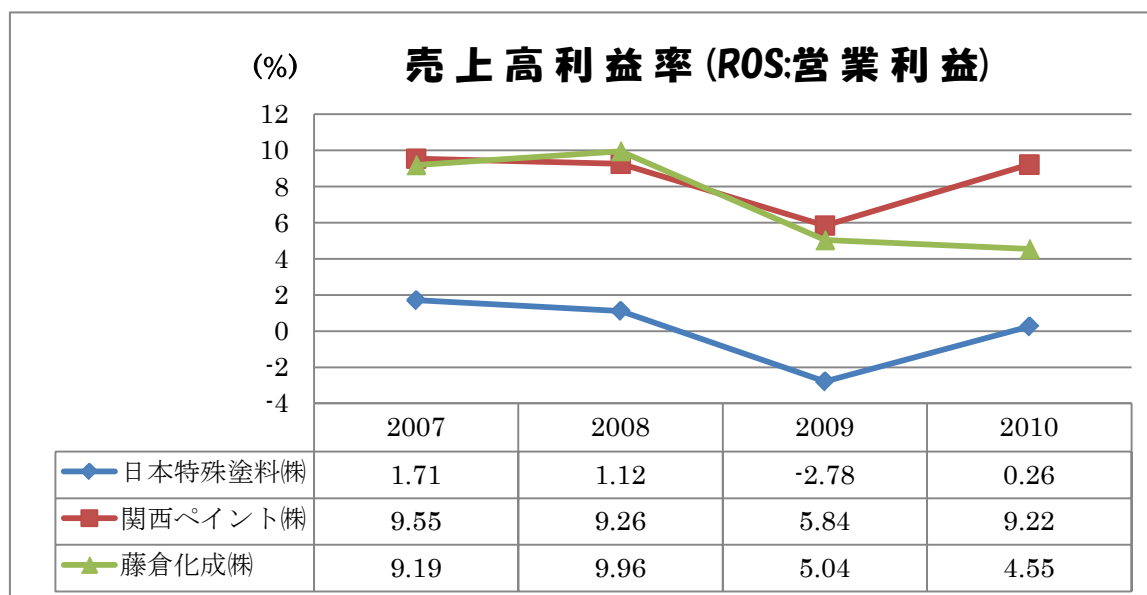
関西ペイント(株)においては、ここ数年で徐々に安定性を高めており、これからも安全性が高まっていくことが期待される。

II. 収益性分析



ROS:売上総利益において、関西ペイント(株)は30%前後という非常に高い水準で推移しており、藤倉化成(株)も2009年時でもほとんど減少することなく徐々に上昇しているのが見受けられ、売上総利益からみた収益性は高いとみてよいだろう。

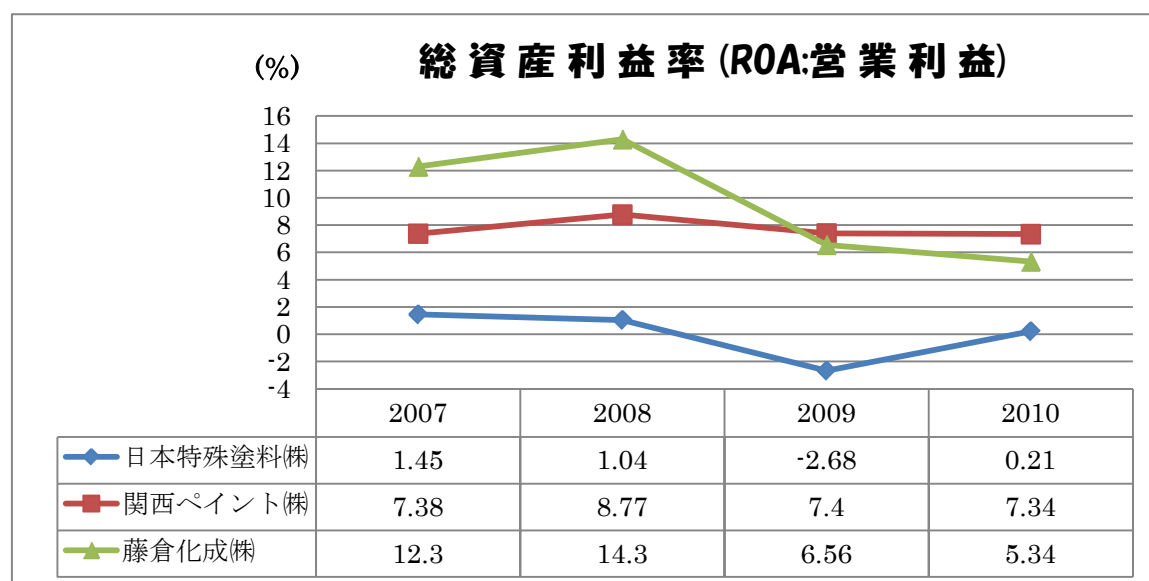
一方、日本特殊塗料(株)は、他の二社と比べると低い値で推移している。しかし、2010年の上昇が売上高の減少と売上総利益の増加が要因だということを考慮に入れると、今後改善に向かう可能性はあると思われる。



ROS:営業利益において、業界平均は2008年3月で7.38%、2009年3月で3.34%ということ考虑に入れると、関西ペイント(株)と藤倉化成(株)は常に平均を超えており、営業利益に対する収益率は高いと言えるだろう。しかし、藤倉化成(株)は2010年になっても立て直し切れていないので、今後の動向に注視すべきだろう。

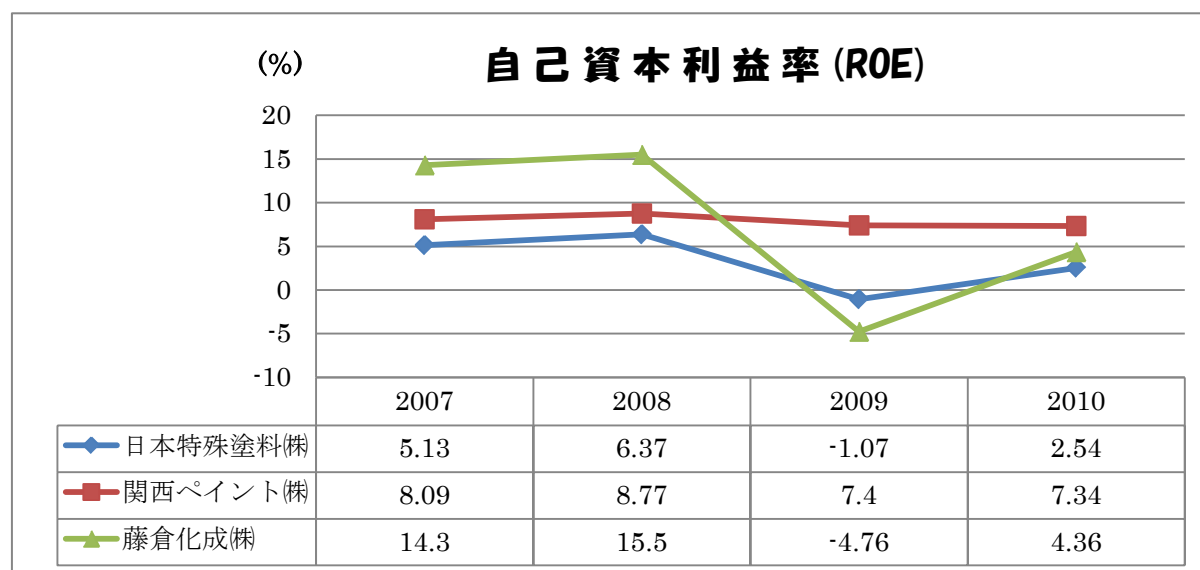
日本特殊塗料(株)においては、業界平均を常に下回っており、特に2009年には営業利益がマイナス

となり、収益性に期待はまったくできなかった。2010年にはとりあえずマイナスからは脱却しているため、今後うまく経営できるかが注視されるだろう。



ROA;営業利益においては、業界平均が2008年7.21%、2009年3.14%であることを考えると、関西ペイント(株)と藤倉化成(株)は平均を上回っており、この項目でも収益性はあるといえるだろう。

一方日本特殊塗料(株)は0%前後を行き来して、2009年に至ってはマイナス値になってしまっており、収益性は業界内では非常に低いと思われる。



ROEにおいては、関西ペイント(株)は2008年の業界平均9.01%をわずかに下回ってしまったが、世界的不況であった2009年の業界平均1.02%は大きく上回りここ数年8%前後を維持しているため、収益性は安定しているといえる。

藤倉化成(株)は2008年以前は15%前後と非常に高い水準であったが、2009年に米子会社の買収よりのれんなどの無形資産の損失などがあつたため、当期純利益がマイナスになりROEもマイナスの値をとってしまった。2010年には、回復の傾向がはっきりと見えるため、今後も収益性は回復すると思われる。

日本特殊塗料(株)は業界平均を常に下回っており、2009年から2010年にかけての回復率も藤倉化成(株)を下回るので、収益性はあまり期待できないと思われる。

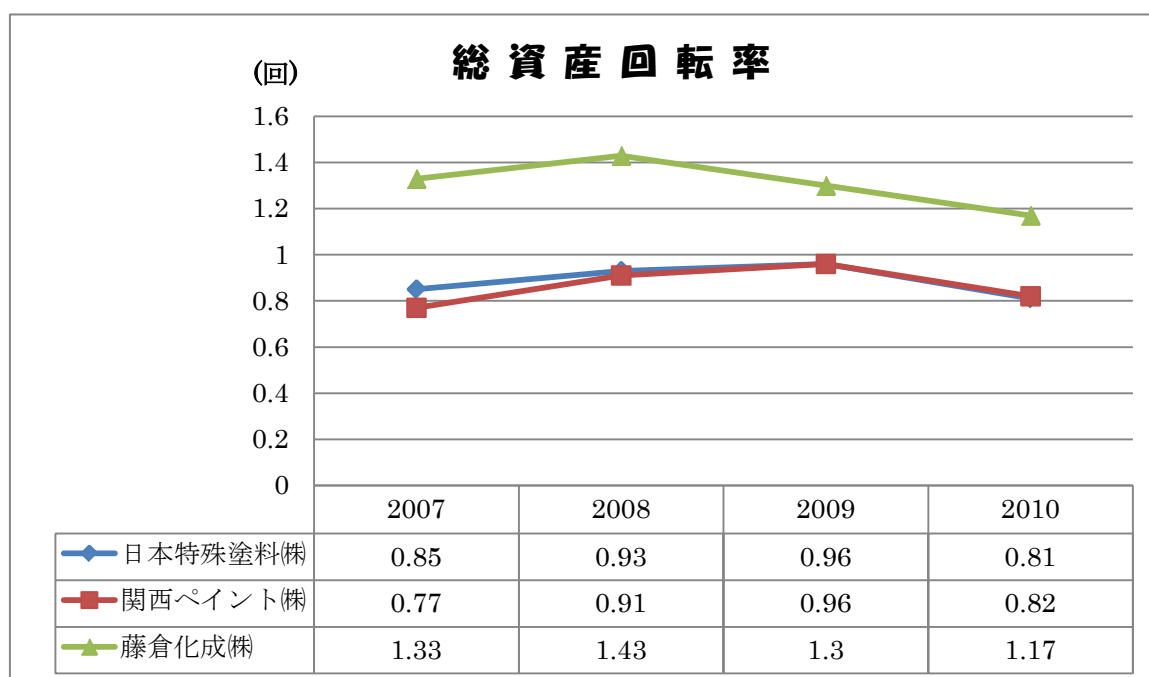
II. 収益性分析—まとめ

日本特殊塗料(株)については、他の二社と比べてどの項目においても劣った値を出しており、平均値も割ってしまう場合も多く見受けられる為、収益性は低いとみられる。今後どのように売上高や営業利益、当期純利益を増やし、余分な費用を削っていくことができるかが、日本特殊塗料(株)の課題ではないだろうか。

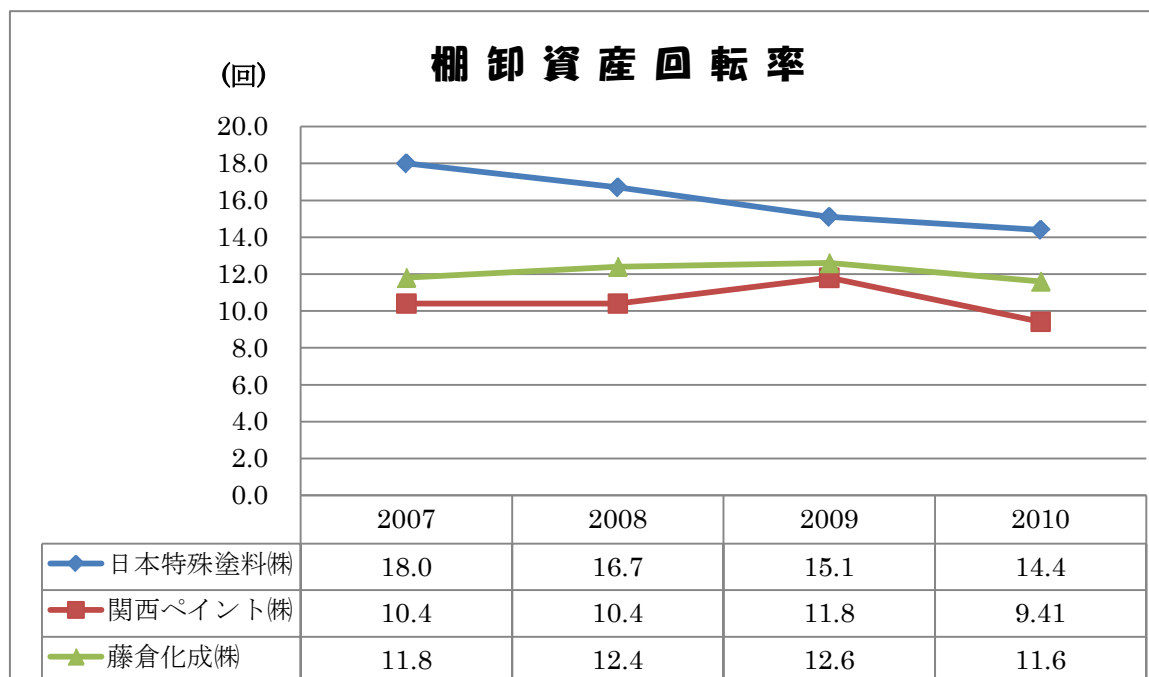
関西ペイント(株)については、非常に高い数値で安定していて、収益性は高いと思われる。今後も安定した成長が見込まれるのではないかと。

藤倉化成(株)についても、2009年に当期純利益がマイナスとなってしまったがすぐに持ち直し、ほかの項目でも平均値は超えているので、収益性はあると思われる。しかしながら、2009年から2010年にかけてマイナス成長になった項目も見受けられたので、今後持ち直していけるかが課題である。

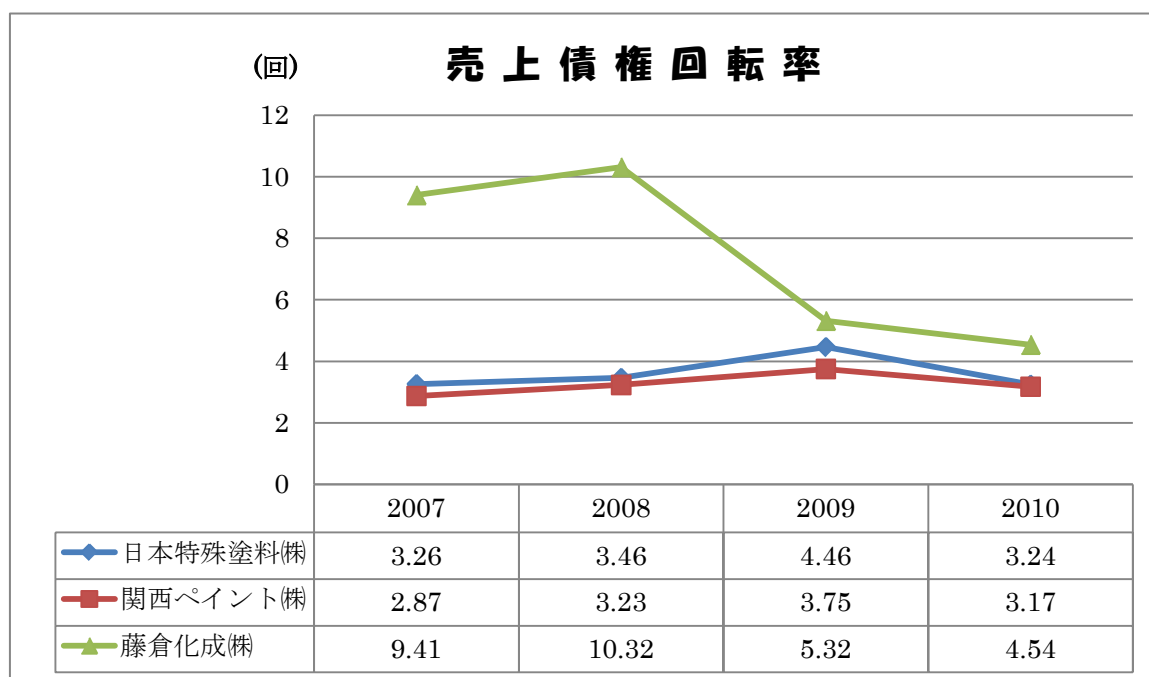
III. 効率性分析



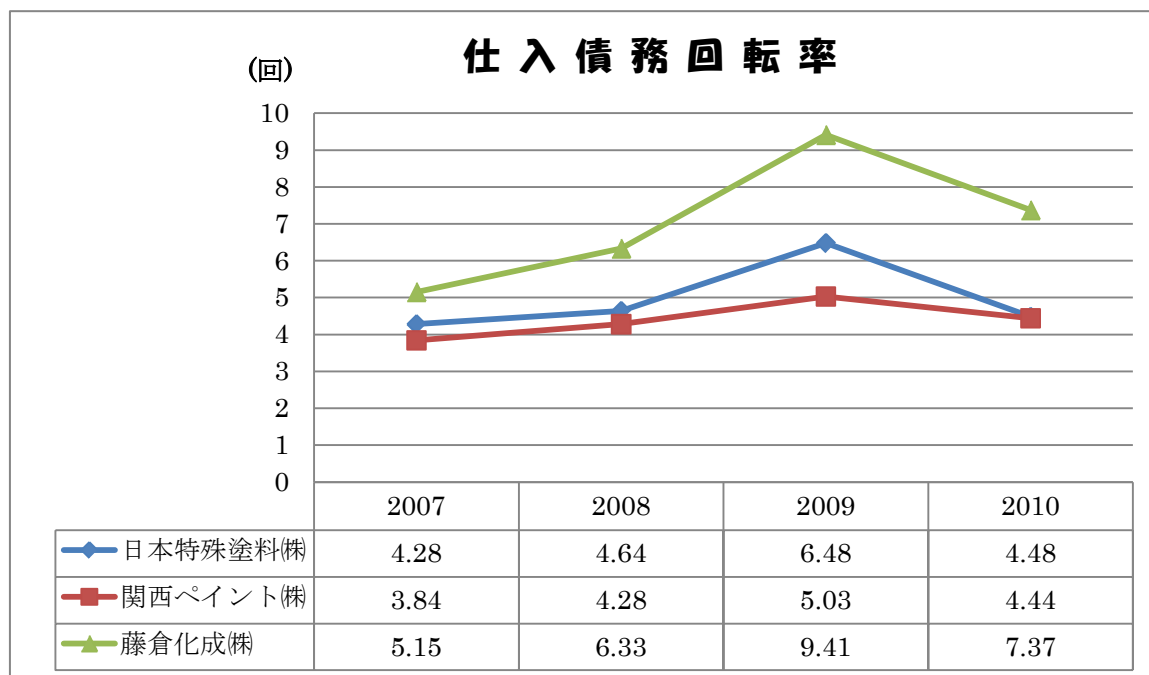
総資産回転率において、業界平均が2008年0.98回、2009年0.94回である。藤倉化成(株)は平均を大きく上回っており効率性は高いといえる。日本特殊塗料(株)と関西ペイント(株)はほぼ同様の推移をしており、平均とあまり変わらないといえる。しかし、どの企業も減少傾向にあるので、ここから総資産に対する効率性をあげられるかが課題となるのではないだろうか。



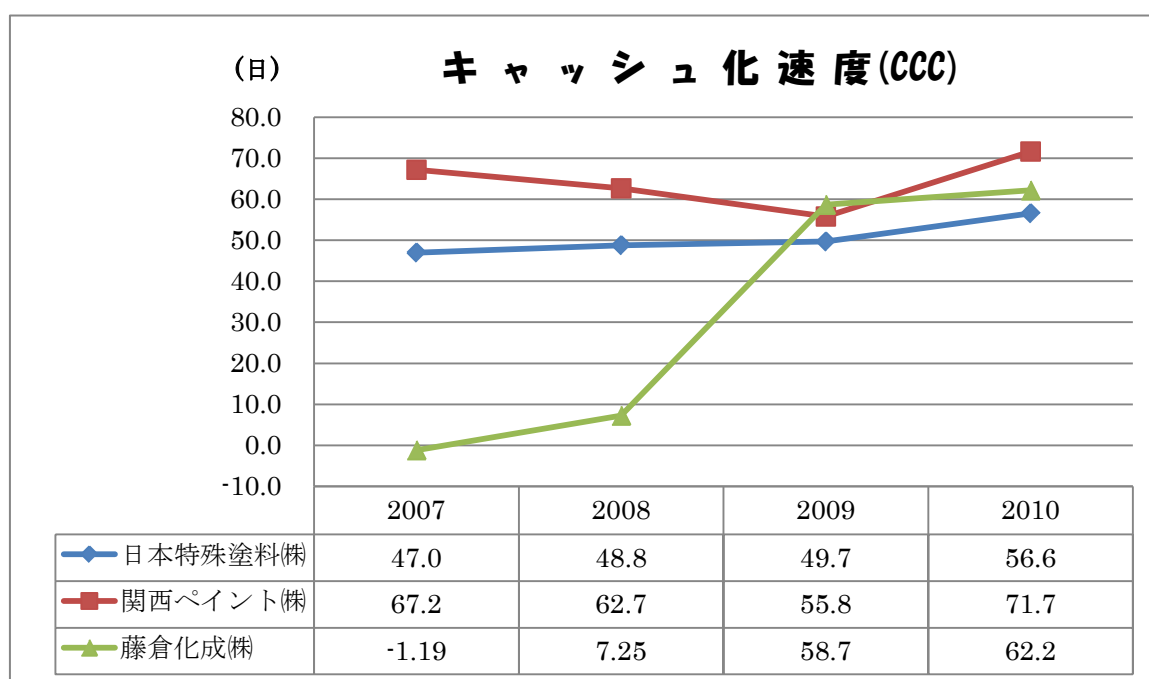
棚卸資産回転率において、業界平均を棚卸資産回転日数から割り出すと、2008年 7.80回、2009年 6.80回となる。平均値を上回ると優秀企業となるので、この三企業は棚卸資産に対する効率性が高いとみてよいだろう。



売上債権回転率において、業界平均を上と同様に割り出すと、2007年 4.51回、2008年 4.76回である。藤倉化成(株)は2007年、2008年と非常に高い水準だったが、2009年以降大幅に下落し、平均をわずかに超えるくらいにまでになってしまい、今後の動向次第では平均値を下回ってしまう可能性も否めない。ここでも、日本特殊塗料(株)と関西ペイント(株)はほぼ同じの推移で平均値も下回っており、効率性は低いだろう。



仕入債務回転率において、業界平均が不明である為基準となるものがないが、この三社で比較すると日本特殊塗料(株)は5回前後、関西ペイント(株)は4回前後で推移しているのに対し、藤倉化成(株)は2009年の9.41回をピークに平均約7回で推移しており、前者の方が効率性は高いと言える。



CCCにおいては、業界平均の値が出ていない為に三社で比較すると、藤倉化成は2008年までの二年間は10日以下と非常に優秀な値を出していた。一方の日本特殊塗料(株)と関西ペイント(株)は常に50日前後を記録している。しかし、藤倉化成(株)は売上債権回転率が下がり、仕入債務回転率が上がったので、2009年以降他の二社と同じ程度の値をとるようになってしまった。

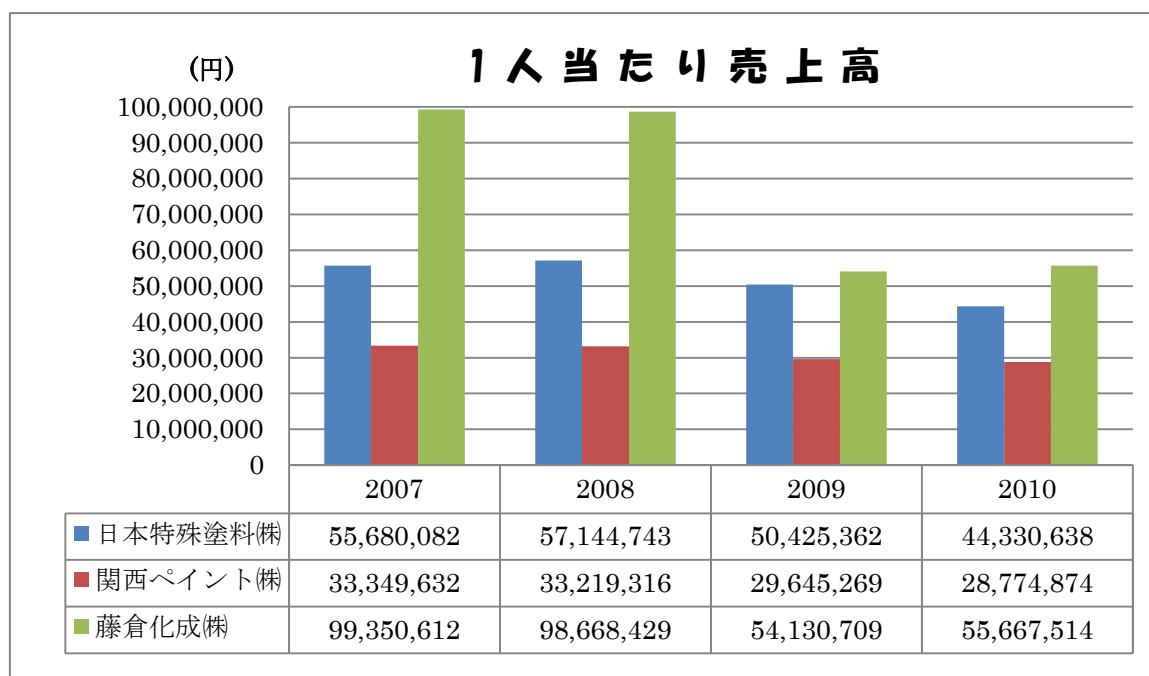
またどの企業も2009年から2010年にかけて、多かれ少なかれ上昇してしまっており、今後の動向ではさらに悪化していく可能性を孕んでいる。

III. 効率性分析－まとめ

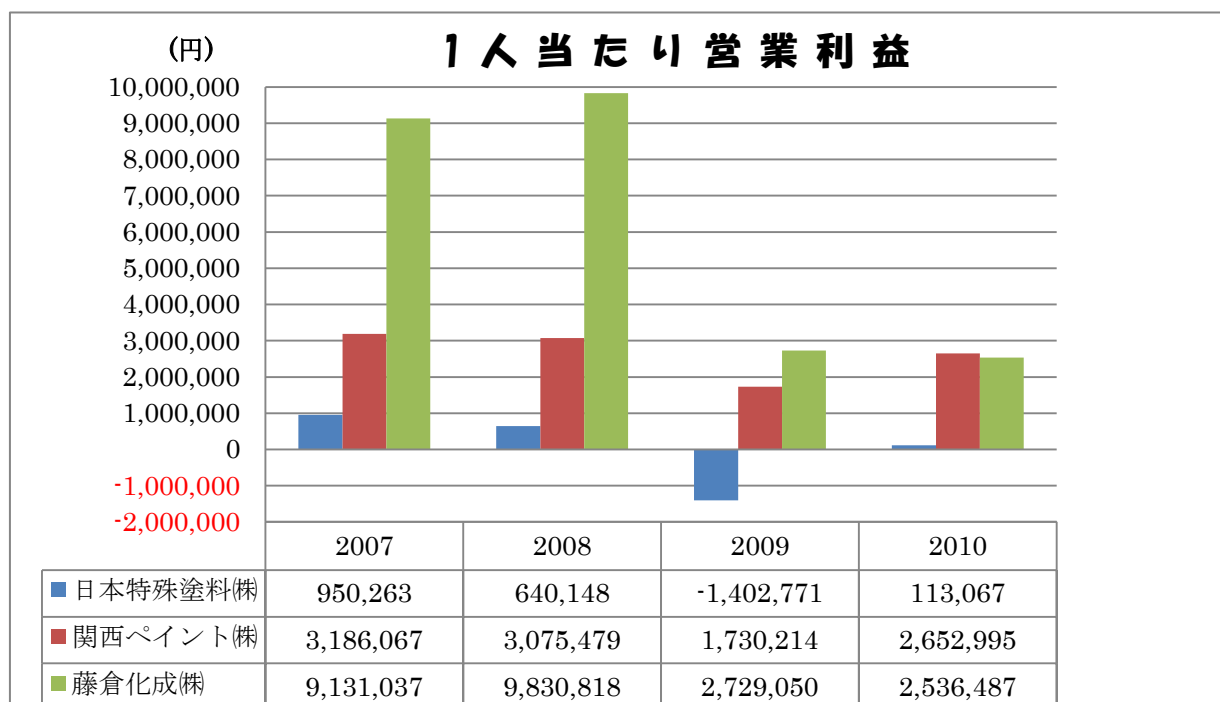
この項目では、日本特殊塗料㈱と関西ペイント㈱がほぼ同じような推移を見せていた。総合的に見れば業界の中では平均的であると言えるのではないか。一方の藤倉化成㈱は多くの項目で2009年を機に効率性が悪化している傾向にある。

また、どの企業においても言えることだが、仕入債務回転率を除いたすべての項目で効率性が悪化傾向にある。今後悪化傾向に歯止めが掛からないようであれば、無駄が多い企業となり、自ずと企業評価が下がってしまうと思われる。全ての項目で業界平均を上回れば効率性には問題なしと言えるのだろう。

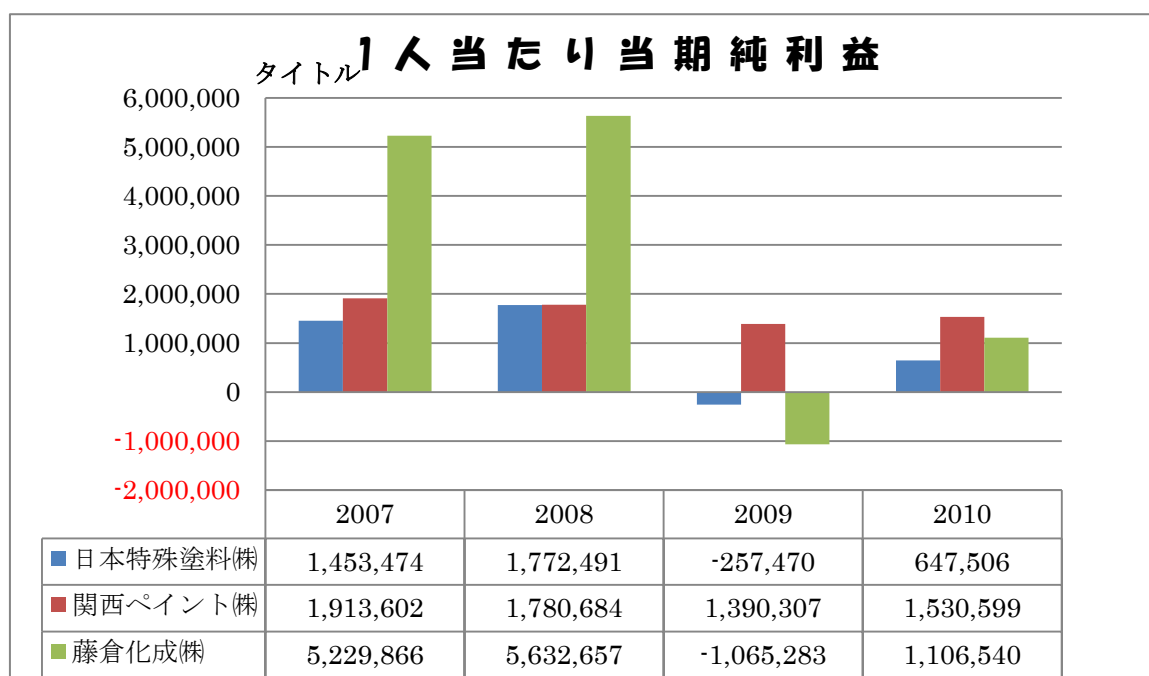
IV. 労働効率性分析



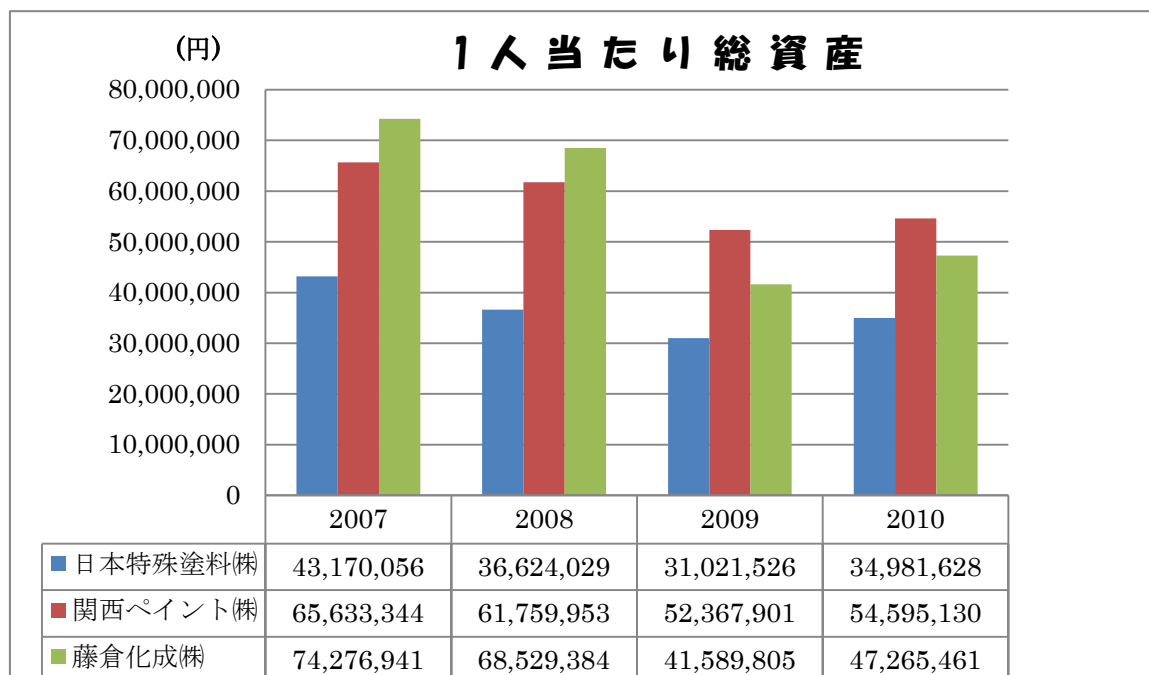
一人当たり売上高において、業界平均が2008年53,670,000円、2009年48,520,000円である。藤倉化成㈱は2009年に子会社の増加により従業員数は急増したものの、売上高は伸びずじまいだった為に平均近くまで減少してしまった。日本特殊塗料㈱と関西ペイント㈱は従業員数はほとんど変わらないので、このグラフが売上高に直結してると考えられる。日本特殊塗料㈱は平均値を超えており、労働効率性は十分にあるのだろう。関西ペイント㈱は平均値より20,000,000円くらい少なく、労働効率性は低いと思われる。



一人当たり営業利益において、日本特殊塗料(株)は100万円以下という低水準が続いており、営業利益に対する労働効率性は低いと思われる。関西ペイント(株)は200~300万円くらいを推移しており、売上総利益からの減少も少ないので、労働効率性は高いと言える。藤倉化成(株)は先ほどと同じように、2009年の従業員数急増で激減しさらには2010年には関西ペイント(株)に抜かれてしまっている。今後も減少するのなら労働効率性はいいとは言えなくなるだろう。



一人当たり当期純利益において、関西ペイント(株)は2009年の不況時であってもプラスを維持しており安定した労働効率性だと思われる。日本特殊塗料(株)と藤倉化成(株)は2009年には当期純利益がマイナスになり、非常に厳しい値が出た。ただ、2010年にはプラスへと戻っている為、労働効率性は改善に向かうのではないかとと思われる。



一人当たり総資産において、それぞれのあたりの大きさには違いがあるものの、推移の仕方はほとんど同じである。2010年は以前の良好な時期と比べると減少してしまっているが、回復傾向にはあるので、労働効率性は今後も改善していくと考えていだろう。

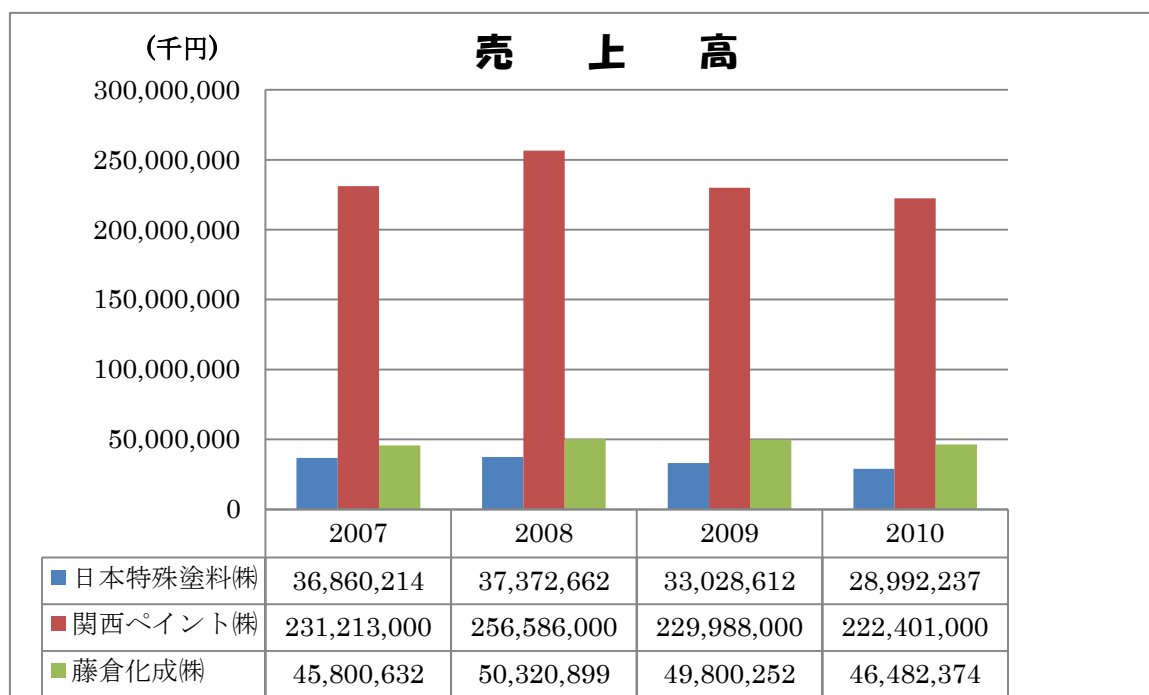
IV. 労働効率性分析—まとめ

日本特殊塗料(株)については、1人当たりの売上高では関西ペイント(株)と同程度であったが、営業利益、当期純利益、総資産へと項目が変化すると、悪化していく傾向にある。このことから関西ペイント(株)よりも余分な費用が発生していることが分かる。その費用をできるだけ削り、利益を増やしていけるかが日本特殊塗料(株)の今後のポイントとなるだろう。

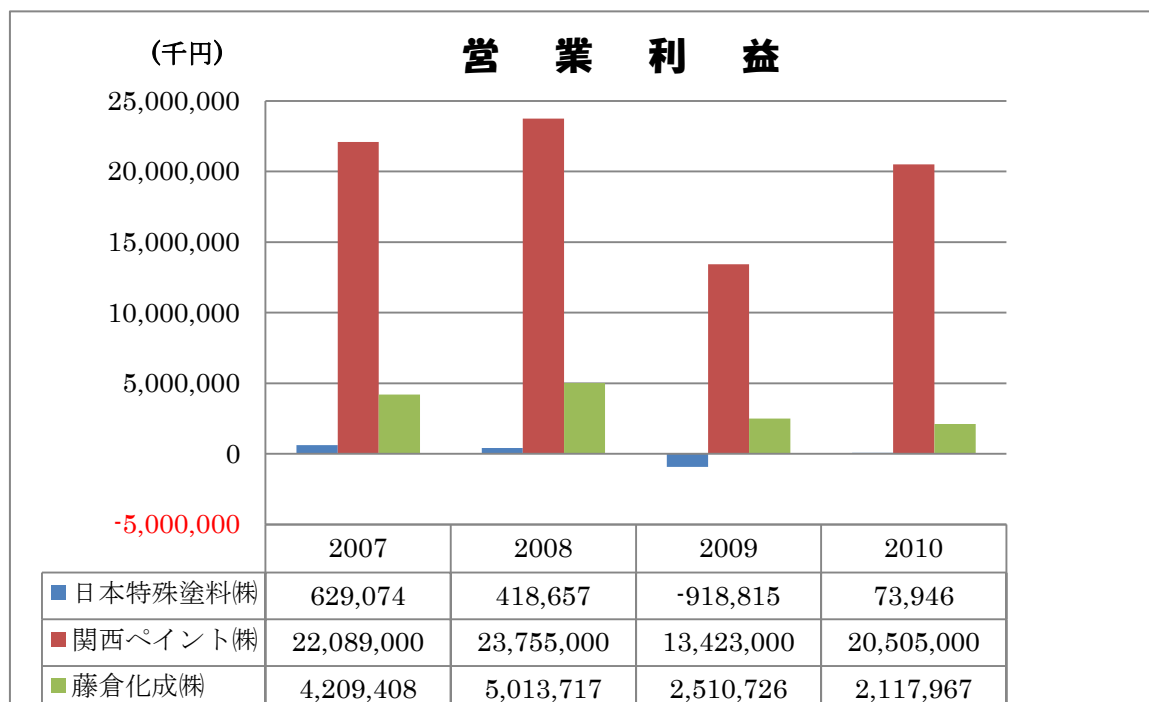
関西ペイント(株)については、従業員数が他の2企業の10倍前後と非常に多いところを鑑みると、低く数値が出るのは仕方ないのではないかとと思われる。それでも安定した推移を見せている上、2010年には改善傾向になっているものも多きことから、労働効率性は期待してもよいだろう。

藤倉化成(株)については、2008年以前は非常に高い数値で推移していたものの、2009年時点で従業員数が急増し売上高や営業利益がそれほど増加しなかった為、急落した格好である。この企業に関しても、2010年に改善に向かう項目が多くみられた為、労働効率性に期待してもよいのではないかとと思われる。

V. 成長性分析

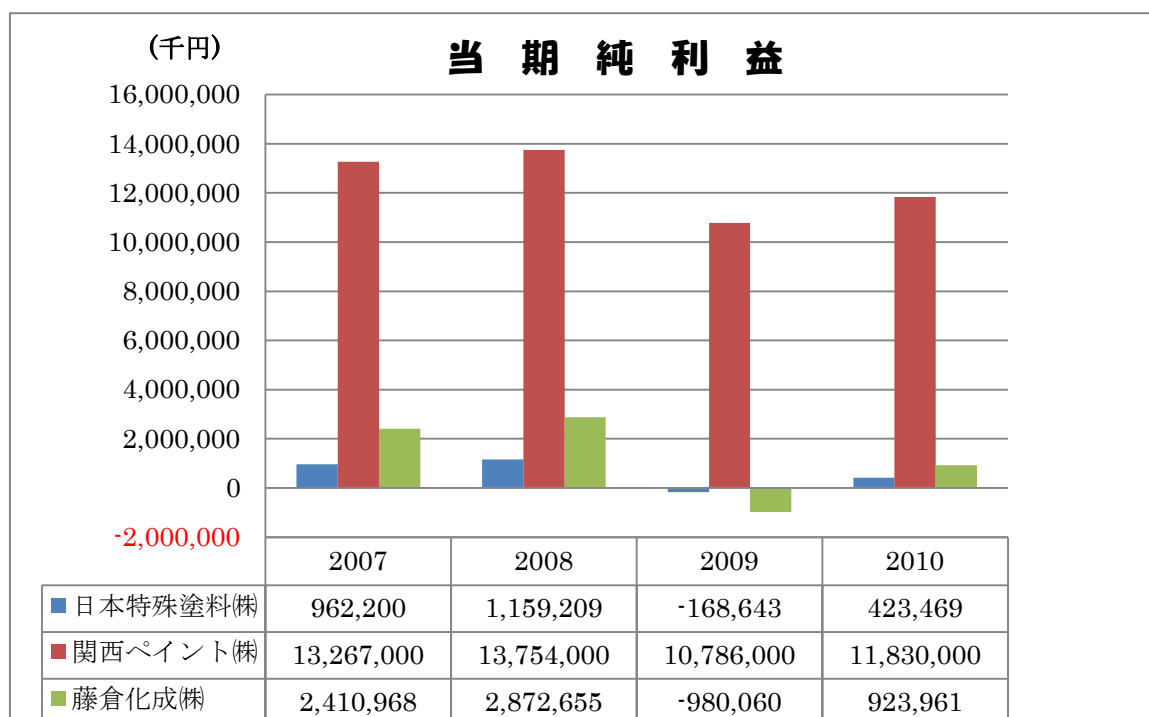


売上高において、どの企業も 2009 年から 2 年連続で減少傾向にある。これも長引く不況の影響だろうが、この三社は成長が停滞、もしくは衰退しているように思われる。



営業利益において、売上高と違った動きがみられる。藤倉化成(株)は売上高をそのままいくらか引いたように推移は同じであるが、関西ペイント(株)は 2009 年に一旦減少するものの、2010 年には大きく改善されているので、今後の成長には期待してもよいのかもしれない。

日本特殊塗料(株)は 2009 年はマイナス成長となったが、2010 年にはわずかながらプラスに転じている。だからと言って成長性には不安が残るので、今後の動向には注視すべきだ。



当期純利益においてもやはり、2009年がキーとなってくるようである。2009年にマイナス成長となった日本特殊塗料(株)と藤倉化成(株)は2010年にはプラスに転じており、今後もこのまま上昇していくことが望まれる。関西ペイント(株)も2010年には改善されているので、成長性には期待してもよいのではないだろうか。

V. 成長性分析—まとめ

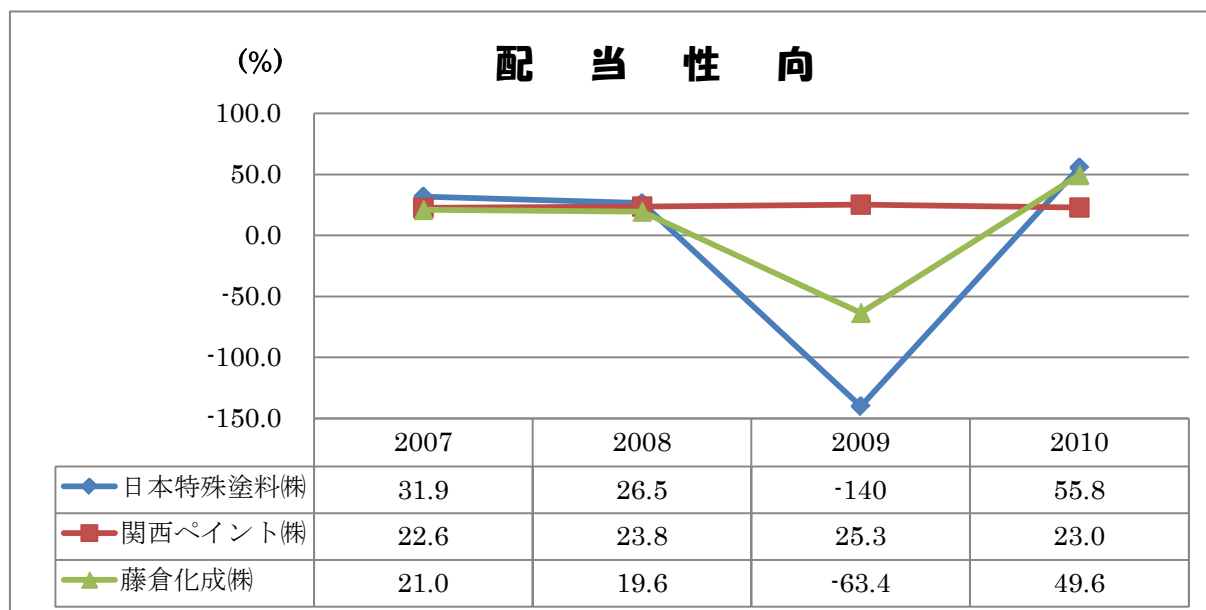
全体的に言えることは、2008年後半から発生した、100年に1度といわれる世界的な大不況がキーポイントとなっている、ということである。2009年にはどの項目でもどの企業でも全てが減少しており、企業の成長が妨げられたのは間違いないだろう。

日本特殊塗料(株)はここ数年で売り上げが減少傾向にある上に、営業利益と当期純利益が2009年にマイナスとなってしまっているため、成長性は低いと思われる。ただ、どちらの項目に関しても、2010年には再びプラスへと戻っていることから、今後の動向次第で以前程度の成長性にまで戻れる可能性はあるのではないかと。

関西ペイント(株)については、やはり他の企業と同様に2009年にはどの項目でも減少しているが、2010年には2008年程ではないが、次の1年で以前と同じ水準まで戻せるところまで成長している。また、どの項目でもマイナスとなっていない点に関しても、今後の成長性に期待してもよいのではないかと思える要因となるだろう。

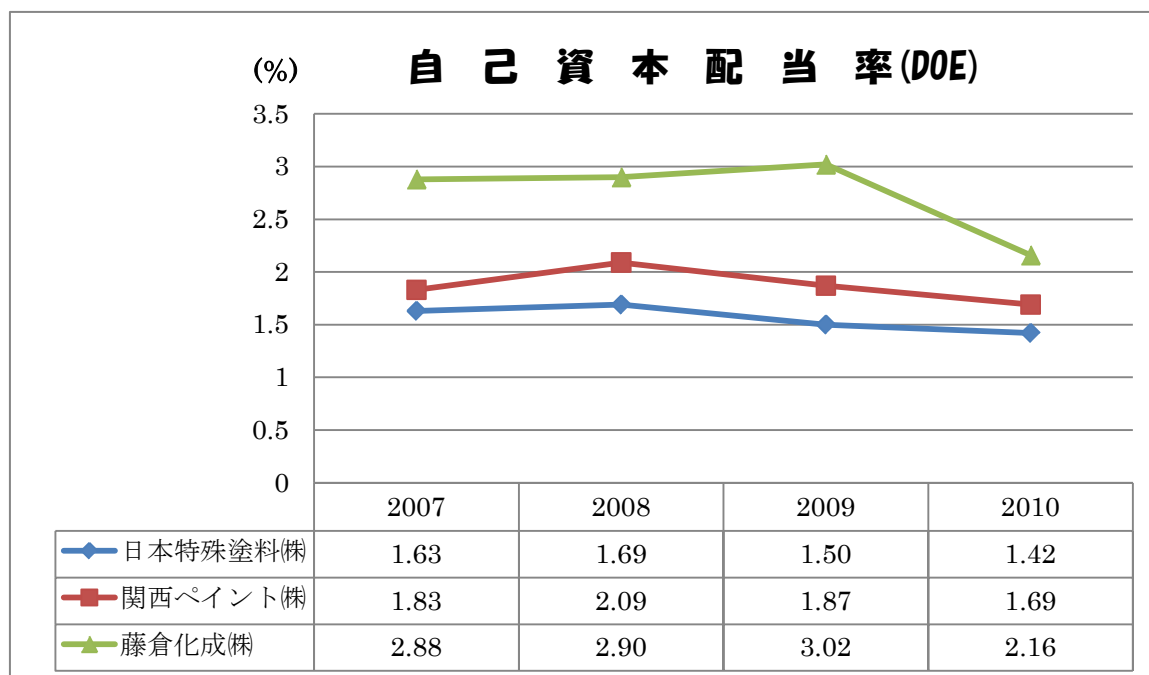
藤倉化成(株)については、心配な点がいくつかある。まず、売上高と営業利益が世界的な不況から1段落した2010年になっても減少を続けている点である。次に2009年に当期純利益が日本特殊塗料(株)よりもマイナス値が大きい点である。後者は、2010年には改善されていたので大丈夫だろうが、前者は成長性が低いことを示す結果となってしまった。今後も成長性が低くなる可能性は否めないだろう。

VI. 株式還元率分析



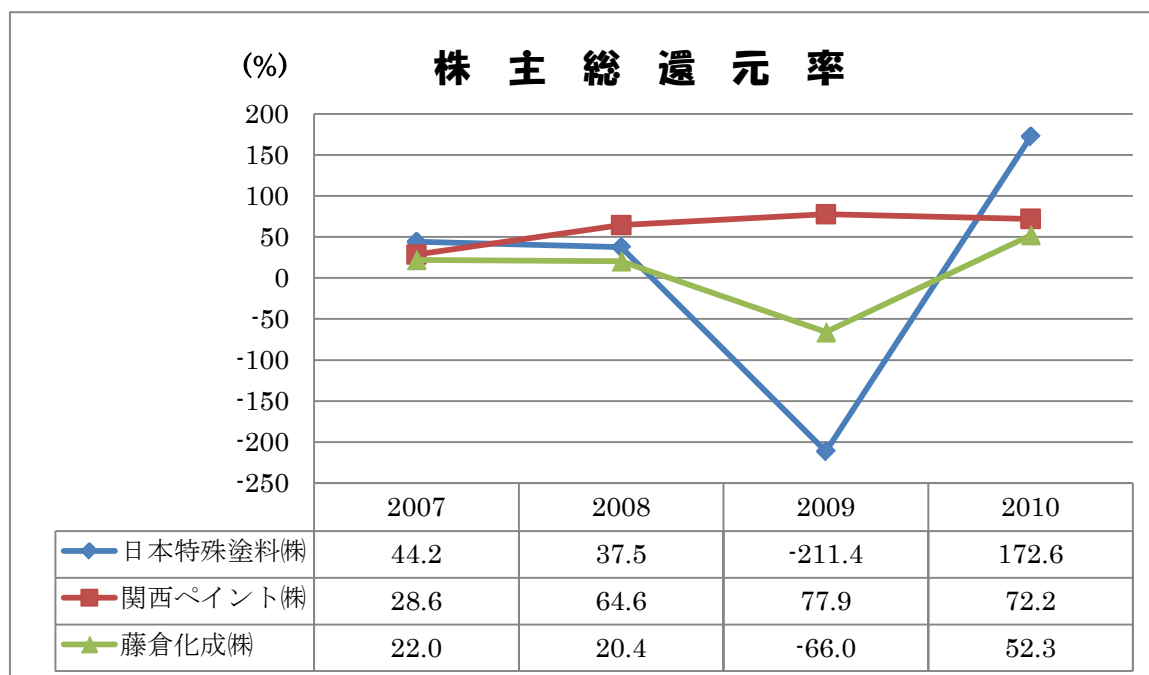
配当性向においては、業界平均が 2008 年 24.80%、2009 年 243.79%である。配当性向が高いほど、当期の純利益を株主の配当金に多く回しているということになる。関西ペイント(株)は 2008 年の平均である 25%前後を維持しており、平均的であると言える。

一方、日本特殊塗料(株)と藤倉化成(株)は 2009 年に当期純利益がマイナスになった為に会社の資金を削ってしまったことが窺える。2010 年には 50%に持ち直しているものの、当期純利益の半分程度を使うのは恐らく不本意だと思われる。他のところに当期純利益が使えるようにすることが課題になるだろう。



自己資本配当率(DOE)において、業界平均が 2008 年 2.21%、2009 年 2.63%である。DOE は最近投資家などの間から注目されつつある数値であり、会社の未来を考えると重きを置く必要がある項目である。日本特殊塗料(株)と関西ペイント(株)は平均を下回っているうえに、下降傾向にあるので、

株式還元率は悪いと思われる。藤倉化成(株)においても2009年までは3%前後を推移しており良好といえたのだが、2010年に一気に減少してしまい、株式還元率に不安が残ってしまった。



株主総還元率において、日本特殊塗料(株)はかなり苦労しているようだ。2009年は当期純利益がマイナスであり、2010年は自己株式の依存度急上昇で安定しておらず、良い状況とは言えない。藤倉化成(株)も2009年には当期純利益がマイナスになってしまったが、2010年には株主総還元率が50%程度と安定しており、また配当性向から数値がそれ程変化していないことから、自己株式に依存していないとみられる。関西ペイント(株)は株式総還元率が増加傾向にあること、配当性向から数値がかなりかけ離れていて自己株式への依存度が高いことの2点が懸念材料である。

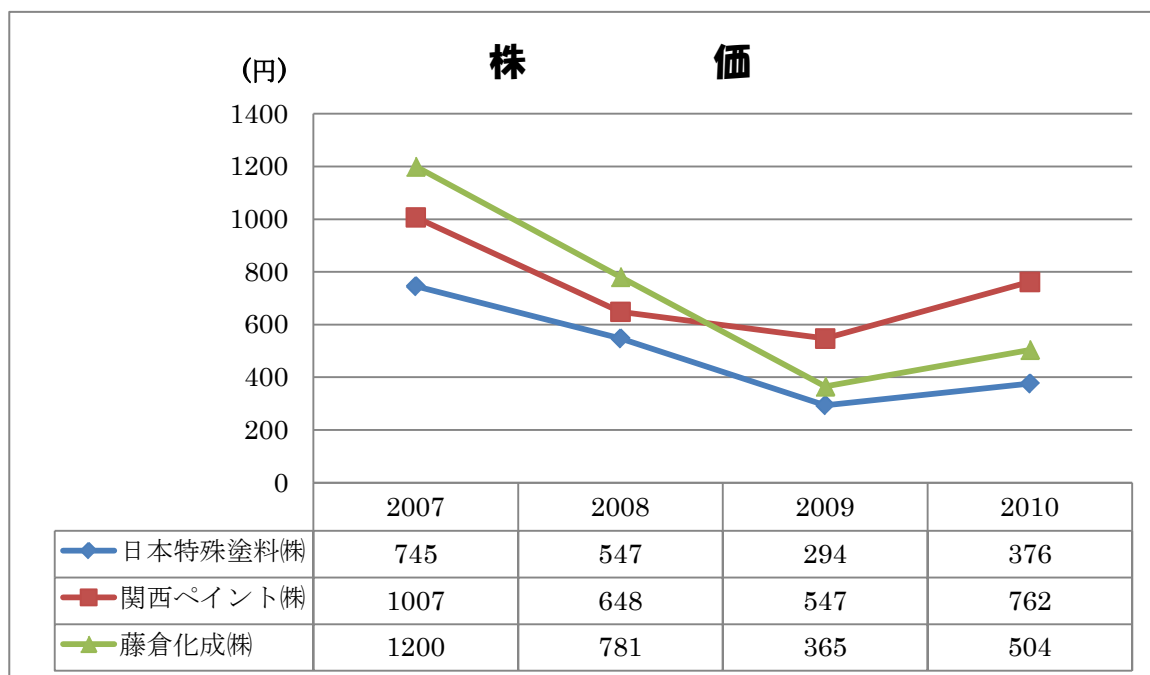
VI. 株主還元率分析—まとめ

日本特殊塗料(株)において、株主還元率に関しては非常に苦労しているところが窺える。2009年においてはマイナスの数値が出てしまったが、しっかりと株主に還元しているので、企業の株主を大事にしようという心意気は窺えるので、今後期待したい。

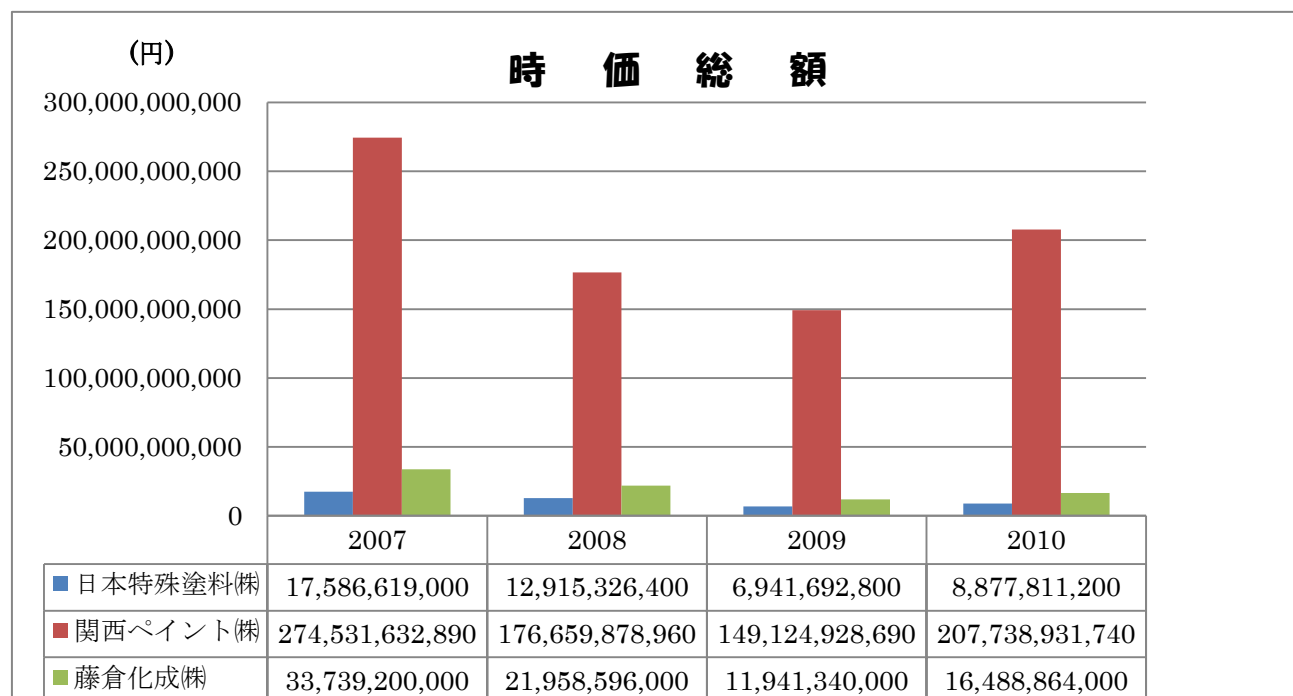
関西ペイント(株)については、どの項目においても安定性があるように見える。しかし、DOEと株主総還元率においてはあまりよいとは思えないので、改善していく必要があるだろう。

藤倉化成(株)に関しても、日本特殊塗料(株)と同様に2009年にマイナスの値になってしまって苦労しているけれども、日本特殊塗料(株)よりは安定した動きのように思える。2009年を除けば、株主還元が一番安定しているのではないかと思う。

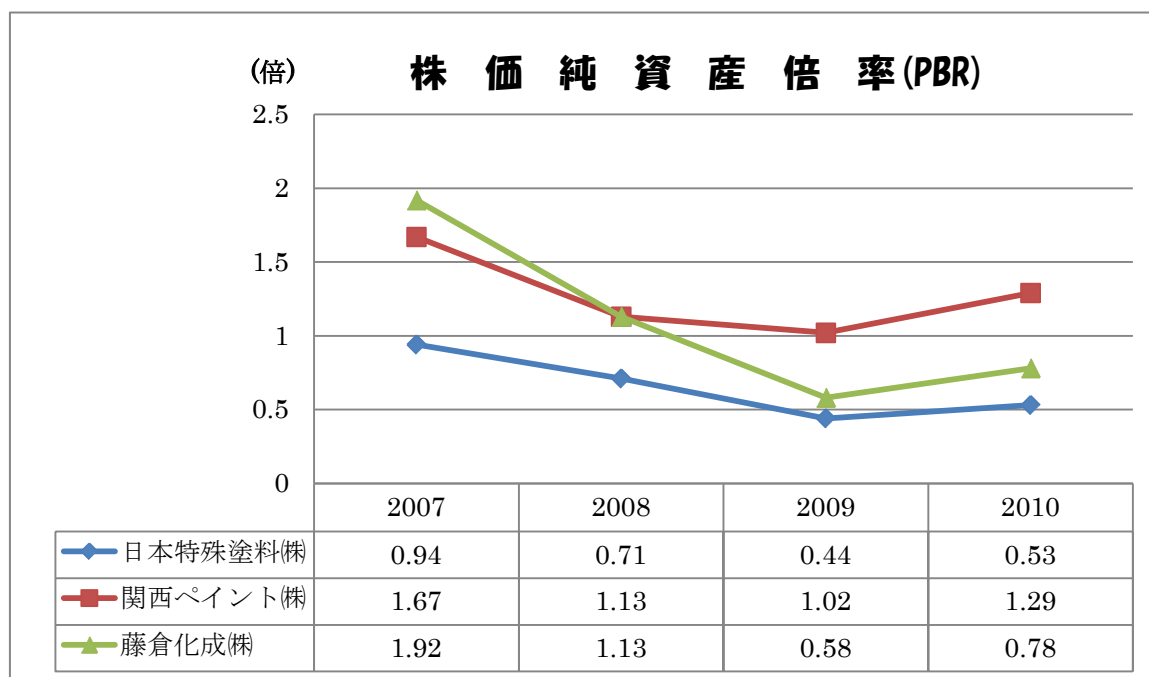
VII. 市場評価分析



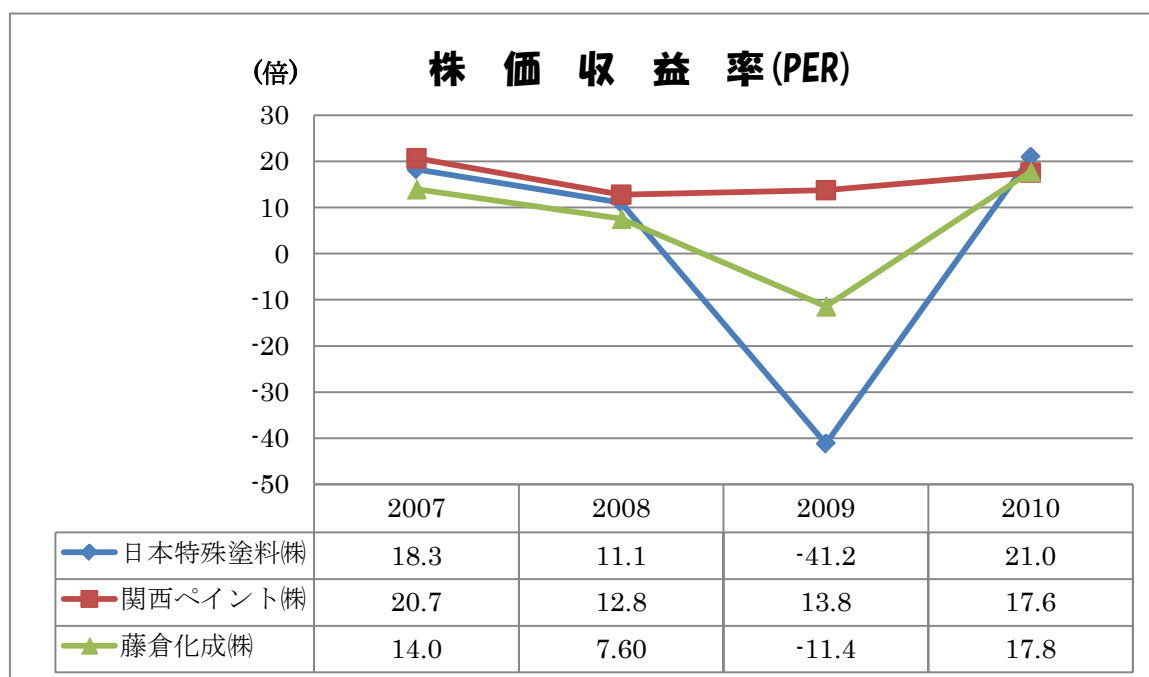
株価においては、どの企業においても同様の推移をしている。2009年までは下降傾向にあり、2010年に持ち直しているというものである。



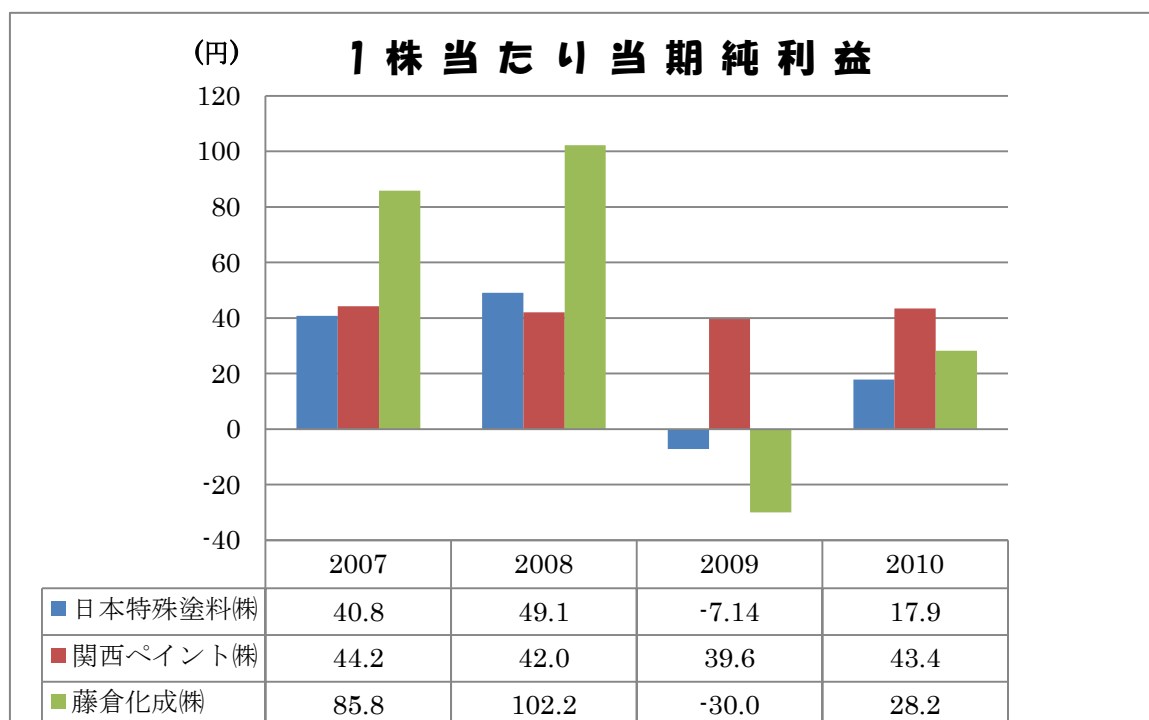
時価総額においても、株価と同じような推移を見せている。日本特殊塗料株や藤倉化成株は発行済株式を増やしたのにも関わらず、時価総額が下がってしまっていることから、非常に株価が影響を与えていることが分かる。



PBRにおいて、ほとんど株価と同じ推移をしていると見える。時価総額が自己資本を割り込んでしまっている日本特殊塗料(株)と藤倉化成(株)は市場評価が低いとみられる。



PERにおいて、2009年を除けばどの企業も10~20%前後を推移しており、安定しているとみてもよいだろう。PERの低いところを狙って投資をする growth 投資をする者たちにすれば、良好な企業ではないかと思われる。



一株当たり当期純利益において、業界平均が2008年62.1円、2009年6.71円である。関西ペイント(株)は40円前後を推移しており安定している。藤倉化成(株)は2008年以前は平均を大きく超え高い水準を維持していたが、2009年にマイナスになり、2010年もまだまだといった感じである。日本特殊塗料(株)平均を常に下回っているため、市場評価が高いとは言えない。

VII. 市場評価分析—まとめ

総合的にみると、2009年を谷にしたような感じのグラフとなっている。やはり、2008年後半から始まった世界的な大不況が大きく影響を及ぼしていると思われる。

日本特殊塗料(株)については、他の2つの企業と比べて低い数値が出ており、市場評価が低いと思われる。ただ、2009年から2010年にかけてはどの項目においてもプラス成長を収めているので、今後期待してもよいだろう。

関西ペイント(株)については、安定しているの一言でいいのだろう。ここでも、プラス成長が見られるので今後期待したい。

藤倉化成(株)において、昔は良かったが、2009年の影響は大きかったと言っていいだろう。今後2008年の水準くらいまで戻せるかが問題になるだろう。

4. 総合的分析

- 日本特殊塗料(株)

効率性を除いた全ての項目で業界平均を割るような数値を出すことが目立った。効率性においても業界平均と同程度にとどまっているので、不安は高まるばかりである。資金繰りが悪化し安全性が損なわれると共に、収益性も見込めないことから、会社の財務状況はどんどん悪化していくだろう。そうすると、株主へ還元していくことも苦しくなり、市場評価も低くなっていくのではないだろうか。

今後どの項目であってもいいから、改善していくことが、企業存続の為にしなければならないことだろう。そうすれば、自ずと他の項目も改善に向かうだろう。

- 関西ペイント(株)

従業員が多く大企業の体をなしているので、非常に安定している印象を受けた。安全性、収益性に関しては非常に高い数値を示していて、問題ないのだろう。他の項目でも平均値程度ではあるが、安定した推移をしている。また、世界的大不況の煽りを大きく受けた2009年の数値から2010年の数値が改善傾向にあるので、今後も企業の財務状況はより良好の方向へと行くのではないだろうか。

- 藤倉化成(株)

安定性、収益性、株主還元率の項目に関しては、安定した推移を見せている。しかし、効率性や成長性などに関しては問題があるので、この問題点を改善できればより良い企業へと進歩していくことができるのではないか。

この企業は3社の中で世界的大不況の影響をいちばん受けたように思える。

5. 参考文献

- EDINET <http://info.edinet-fsa.go.jp/>
- 2010年度 会計・簿記講義資料集 / 円谷昭一
- Yahoo!ファイナンス <http://finance.yahoo.co.jp/>
- 日本特殊塗料(株) <http://www.nttoryo.co.jp/>
- 関西ペイント(株) <http://www.kansai.co.jp/>
- 藤倉化成(株) <http://www.fkkasei.co.jp/>
- 円谷昭一研究室 <http://www7b.biglobe.ne.jp/~tsumuraya-lab/>